



訪問看護では 利用者の人生に 寄り添っている感じがします。

されていた患者さんが退院された場合、退院後3ヶ月間は週5回ペースでアウトリーチ・チームが訪問するとか、集中的ケアをしていますから。

廣 訪問看護の頻度はケースバイケースですが、だいたい週1回くらいが平均的なんです。それを、退院直後のいちばん支援が必要な時期に限って手厚く訪問して、安心して自宅で暮らせるように持っていくわけです。ケースによっては、退院後の支援に向けて少しでも安心していただくために、入院中から関わりを持つこともあります。

中村 アウトリーチ・チームが集中的ケアをするのは、退院直後の方だけとは限りません。「未治療」という呼び方をしますが、本来は治療が必要な精神疾患の方でも、病院につながらないまま、地域に埋もれている方もいらっしゃると思います。そういう方について役所や保健所から相談を受け、当法人が京都府から受託している「長期入院患者等退院後支援事業」の多職種チームとして訪問する

こともあります。

Q 地域に埋もれたままであった精神疾患の方が、医療につながられるようになったのですね。

廣 私は「訪問看護ステーションそうらく」に来る前、病棟で精神科の退院促進にずっと関わってきました。精神科に長期入院される方は、一度状態がよくなつて退院して、訪問看護につながっても、また悪化して入院をくり返すケースが多かったのです。でも、アウトリーチ活動が活発になってからは、アウトリーチ・チームの集中的ケアが地域生活への橋渡しとしてうまく機能するようになり、安心して退院していただけるようになりました。退院促進に携わってきた一人として、アウトリーチの意義と重要性は身にしみてよくわかっています。

訪問看護だからこそできること

Q 同じ精神科領域でも、病棟での看護と訪問看護では違いも大きいと思います。みなさんのご経験を踏まえて、訪問看護だからこそできること、あるいは訪問看護ならではのやりがいをお話しいただければと思います。

脇田 ご自宅にくり返し訪問して関係を深めていく仕事ですから、訪問看護では利用者の人生に寄り添っている感じがしますね。

たとえば、私がずっと訪問してきたある女性の場合、最初はお子さんが小学生だったのに、今年はいもう高校を卒業されて、そのことでまるで我が子が高校を卒業したような喜びを感じました。一緒に悩みながら子育てしてきたような気持ちと言いますか。

あとは、もう亡くなりましたが、ずっと訪問してきた認知症の女性が紀寿（百歳の祝い）を迎えたとき、「あなたの

おかげで百歳を迎えることができました」という「感謝状」をいただいたことが忘れられません。長く訪問看護を続けることができたのは、そういう数多くの喜びややりがいがあったからです。

中村 私の場合、おうばく病院に来る前は一般の大学病院で看護師をしていたんです。そのころといまを比べると、「看護師でも治療を動かしていけるんだ」と実感できたことがいちばん大きな違いのような気がします。

Q 「治療を動かしていける」とは？

中村 大学病院時代には一般の内科などを担当していましたが、その世界では「治療するのは医師」なんです。看護師はその手伝いをするだけというか。でも、精神科の訪問看護に携わるようになって、お薬を使わないリハビリ的支援、生活支援だけでも、患者さんの病状を大きく



ある意味で薬以上に

治療に寄与できる。

それは、精神科の看護、

とくに訪問看護の醍醐味だと思います。